

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 7

流浪の民

鹿島釣狂

大楯・三豊

6月28日は、タカノハ狙いで前野氏と入舟漁港に入る予定だった。金井氏からタカノハ狙いなら入船が最近よい釣果が上がっていると聞かされたからだ。しかし、あいにくの天気予報で日高海岸は相当な荒れ模様らしい。日本海はどうかとみると、稚内の方から天気が回復し、留萌方面は波もなく晴れとの予報だ。この時期釣りものは少ないと思われるがそちらに向かうことにする。

4時、小平町大楯に下りた。渚にはヒラメ狙いの釣り人が立ち並んでいた。竿を4本出した。その内の1本はシャコ仕掛のようなワタリガニ狙いの仕掛にしている。アタリは出ない。しかし、竿を上げるとエサだけが無くなっている。見逃してしまいそうなプルッとした小さなアタリに合わせてみると、その犯人はフグだった。何度かやってみたが投げ入れた途端に小さなアタリが出る。どれもフグらしい。エサが綺麗になくなっている。

ワタリガニ狙いの仕掛に川ガレイが引っかかってきた。場所替えの為に片付けていると、小さな藻屑ガニが掛かっていた。幾つものハリが毛の付いた爪に絡まってしまって、ハリを外すのに手間取ってしまった。たとえワタリガニが掛かったとしても難儀することだろう。これは使えないなと思った。

7時、苫前町三豊に行くことにする。カレイは駄目でも、根があるのでアブラコなら釣れるかも知れない。しかし、フグもうるさいだろう。ハゴトコが釣れた。エサは無くならないのでここにはフグが少ないのだろう。海況はほとんど同じなのだが、少し離れただけでこれだけの差があるのだ。ハゴトコが3匹でお仕舞いにして、10時には切り上げた。

帰りの道中、眠気が出ると困るのでセブナイレブンに立ち寄りコーヒーのLを購入した。

なかなかの効き目だった。途中、前野氏から「砂川オアシスでラーメンでも食べるか？」と問われたが、眠気が起きてしまっただけで困るのでそのまま走った。そして、三笠で高速を下りてから、「だるまやラーメン」に立ち寄った。メニューにあった「どろラーメン」の名称が面白くてそれを頼んだ。スープがドロリとしてコクがあるのだが、私には少々味が濃すぎた。腹は満腹になったが、帰宅してからもショウサイフグの洗礼が悔しくてなかなか寝付けなかった。

琴似・山中

岩見沢釣遊会第4回大会が様似港～エリモ港で開催された。この時期では前野氏が琴似で大釣りしてくる。今回は前野氏に案内してもらって一緒に竿を並べることになった。岡、谷口、西川氏も一緒だ。

7月4日、午後11時には釣り場に着いた。締め切り時刻が午前11時だから12時間という長丁場の釣りになる。私が入った場所は波が少し高かった所為もあるが海藻が少なかったのか根掛かりを繰り返した。皆さんの釣果も芳しくなかった。移動しようと考えていた時にカジカが来た。そのカジカで踏ん切りがつき、これを嫁として後はアブラコ狙いで中山方面に移動することにした。

山中の舟揚場では堀内氏が竿を出していた。バツカンを覗かせて頂くと50cmほどのカジカが大口を開けて収まっていた。1投目で来た大物は、階段下まで迎えに行こうかとも思ったが、足の調子に自信が無く、思い切って防潮堤上までクレーン釣りしたということだ。しかし、その後が全く続かないのでどうしたものかと思っているところだった。

更に奥に進んでいくと、道路脇に先行者の車が停めてあったが、ドライバーは熟睡中だった。私は、山中トンネル前の岩場の状況を空身で確かめにいった。波が岩盤上に上がることはなく、その前が深い切れ込みになっていていかにも大物が潜んでいるように思えたので、そこで竿を出すことにした。もちろん私には初めての場所である。たしか、釣り雑誌にはタカノハも出るところと案内があったはずだ。しかし、釣れてくるのはハゴトコのみだった。

車の中で熟睡中だった釣り人が、私とは離れた盤に出ていった。そちらの方がよいポイントなのかなあとも考える。7時ころ前の盤に渡れるようになったので、そこに移動した。しかし、やはりハゴトコしか釣れない。隣の盤に入った釣り人は、釣りものが無かったのか早々に引き上げていった。左にある岩盤が大きく出てきた。気になっていたのだが深い溝が切れ込んでおり、渡ることは出来ないと思っていた。しかし、膝ぐらいの深さで渡れるようになっていた。今日は大潮である。いつもは渡れないこの盤では大物が潜んでいることだろう。締め切りまであと2時間ほどである。その盤に乗ってあらためて打ち込んだ。投げ込んでからしばらく道糸を出して、仕掛を送り込んでやらなければならないほど深かった。しかし、上がってくるのは最後までハゴトコだけだった。うーむ残念。すこぶる良さそうな海況なのに……。私の見立てが悪いということなのだろう。



総合優勝 堀内正博 氏



身長優勝 吉井 博 氏

賀張港・門別港

7月15日、日高町慶能舞川河口に入ることの出来る天気予報だ。朝、2時に目覚ましを掛けたが早くに起きてしまった。2時出発。4時半には慶能舞川河口に着いたが、天気予報とは裏腹に波が高く釣りが出来そうにもない。賀張港に向かった。防波堤先端部で竿を構える。しかし、アタリがない。時折アカハラのアタリに期待を膨らましたが、タカノハは釣れなかった。

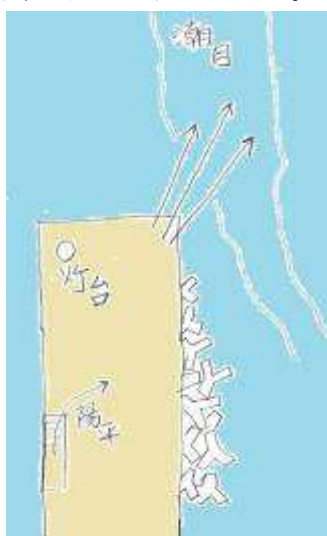
浜益からの釣り人が2名やって来た。今では訪れることもないが、浜益港の白灯台（現在は防波堤がのびて白灯台のあったところはテトラが山積みになり竿を出すことは出来ない）でホッケやクロガシラを大釣りしたことがあった。息子がまだ小学生の低学年のころで懐かしく思い出された。その時の釣り日記がある。

浜益港（1989/5/13・14）

今日は息子と一緒に釣りを楽しむことにした。夜を徹しての釣りに備えてジギスカン、カップラーメン等を買込み午後2時半に出発した。車に乗っている合間も息子は遠足気分でフライドポテト1袋をペロリとたいらげた。まずは浜益海水浴場で竿を出すのが底荒れしているため、海藻が仕掛に絡みつき釣れそうにもなかった。仕方がないので浜益港へと移動した。幸いにも防波堤の右先端が空いていたのでそこに竿を設置した。息子にとっては初めての防波堤からの釣りになるので、防波堤の際には近づかないように口を酸っぱくして伝えた。もちろん私も釣りよりも息子の行動を注意深く見守ろうと決意していた。ポツン、ポツンとホッケや真ガレイが上がった。夕暮れが近づいてきたので竿をそのままにして、階段下のスペースで夕食の準備に取りかかった。しかし、あいにくの雨である。西の空を見るとこれからまだまだ降り続くような気配である。夕食の準備の手を止めて買ってきたおやつをほおぼりながら休憩した。そして、もう一度防波堤の際には近づくなと念

を押してから、エサを取り替えるために階段を上って釣り場に向かった。エサを取り替えていると、息子が手を荷物（プロパン、ジンギスカン、おにぎり、おやつ、水筒等々）を一杯にしてやって来た。そして、「ちょっと目を離した隙にカラスが餅（スアマ）をとってしまった。ごめんなさい」と言うのだ。食べ物をそのままにして自分だけ逃げてしまうとカラスに全部取られてしまうと思ったのだろう。追い払ってもカラスが息子に近づいてきたのは容易に想像できる。怖い気持ちを振り払いながら重い荷物を抱えたのだ。自分の息子ながら何と健気なのだろう。大変愛おしく感じる。

夕飯を食べに海水浴場前の食堂に行く。息子はカレー、私はラーメン。今日はこれでお仕舞いにして寝ることにした。しかし、漁港基部ではホタテ駕籠を洗っているために臭くてたまらないので、浜益郷土資料館の前浜に行って休む。



浜益港見取り図

午前3時、息子を車に置いたまま釣り場に戻った。初めのうちはギスカジカばかりだったのだが5時ころよりホッケの入れ食いにあう。35cmほどのクロガシラも釣れた。6時、息子との約束があったので後ろ髪を引かれる思いで車に戻ると、既に起きだしていてカップラーメンを食べたいという。やむなく資料館前浜に移ってお湯を沸かして食べさせた。ホッケが湧いている状態なので、続けて息子と釣りが出来たらどれほど楽しいだろうかと思ったが、息子が帰りたと言ったので帰途につくことにした。



浜益港での釣果（息子ではなく娘と一緒に）

最近、タカノハで売り出し中の門別港に向かった。門別港の西防波堤ではやはりタカノハ狙いの釣り人が何人も竿を出していた。それでも竿を出す気にはならなかった。どこにでもいる親しげな釣り人が話し掛けてきた。今日は誰も釣る者はいなかったが、昨日は3枚釣ったというものだ。

気を取り直して、誰も釣り人のいない外防波堤先端に釣り座を構えることにした。

アタリが全く出ないので寝転がって、目を閉じる。目蓋を閉じると、皆既日食の太陽のように輪郭だけが光の輪となり、その中は暗黒の坩堝^{るつぼ}のように光を呑み込んでいく。そして、それが目の裏側一面に拡がりグリーン^{グリーンの}の緞帳で覆われ、その緞帳が開くとオレンジ色やブルーの中幕が下りてくる。私達は地球の生態系の一部であり、太陽系の一端に位置し、宇宙のリズムに身をゆだねているのだ。

コトンと音がした。目を開けると竿先が揺れている。竿尻がコンクリートの三和土（たたき）を打ったのだろう。竿を手に持ちググツとした大きなアタリで、合わせを入れた。大物だ。グイグイと海底目指して突き刺さる。今年になってようやくタカノハに出会えるのだ。防波堤の際まで寄せると、なんだかタカノハとは違う感じがする。クロガシラだろうか？海面まで浮かび上がってはまた、キリキリと竿先を絞り込んでいく。タモを用意していなかったなので、意を決して、大きく湾曲した竿の反動を利用して岸壁に上げた。小刻みに尻尾を振るわせていたのはクロガシラだった。メジャーを当てると43.8cmを指していた。

2時半、厚真町のこぶしの湯に立ち寄った。温泉につかった後、遅い昼食をとろうとレ

ストランに向かうと、閉まっていた。2時迄の営業だった。コンビニでおにぎりを買って食べるようになった。しかし、晴れ晴れとした気持ちで帰りの道中は眠くはならなかった。



クロガシラ43. 8cm

慶能舞川河口・清島

天気は晴れなのだが波が高い日が続いたので、しばらく天気予報と睨めっこすることになった。7月21日、波が治まる予報が出たのでタカノハ狙いで出掛けた。しかし、雨模様になっている。

慶能舞川河口は、少し波が高いがやれると判断した。海も澄んでいる。先行者が2名いた。一人は地元の老人で河口でアカハラ釣りをしていた。刺身が旨いという。もう一人は、これから竿を出す準備をしていたところだ。彼の相棒が昨日来てみたが、まだうねりが強く釣りにならなかった。今日は先日から続いていた波がようやく治まったので来てみたのだそうだ。

先行者の先で竿を出した。アタリは皆無だ。エサもそのままの形で戻ってくる。たまに竿を揺らすのはアカハラのみだ。昆布拾いの漁師がやってきた。その人の話によれば、タカノハの時期は6月だそうで、その頃に沖の網にも入るようになってきたという。帰り際にもう一人の釣り人がやって来た。昨日は清島の大きな駐車帯の前に7人が入って5枚上がったということだ。今の時期よりも、8月末から11月までがよいそうだ。

10時に竿を片付けた。そして、10時半に清島の駐車帯に車を停めて様子を見に行った。慶能舞と同じような砂浜が続いている。麦わら帽子を被ってポロシャツに腕抜きをはめ、長靴にも足抜きもはめた釣り人が竿を出していた。その御仁は言う。

「この辺りで釣りをするのは、みんな顔見知りで友だちだ。夕張の人は30年来通っている。昔の釣りが忘れられないようだ。俺は地元しか釣りに行っていない。ホルを飼っていた。ホルスタイン種のことだ。手広くやっていたので冠婚葬祭などにはヘルパーに頼んだが、釣りには行けなかった。今年、息子の代に譲り、ホル全てを始末して和牛ばかりになった。足腰が痛い。無理にでも作業しなければならないので痛いのを我慢していた。今は満足にお座りが出来ない。息子に譲って少し太ったのも原因のようだ。

カジカは旨い。アブラコに虫が入っているのを見たことが無い。昔は浜厚真港や苦小牧港でも釣りをした。その時はクロガシラがよく釣れた。ここでも昔はアナゴが釣れたのだよ。今は釣れることはない。サケを釣りながらタカノハを狙っていることが多く、どちらがメインだか分からない。一時期、サケ釣りで縄張りを張ろうとした者がいたが、俺がやめさせた。今時期はのんびり釣りができる。」

のんびり出来るのはよかったがアタリもないので彼と同時にやめた。帰りは「いずみ食堂」で蕎麦を食べた。

湯泊岬

7月24日、女房が孫の顔を見に娘夫婦の所に出掛けた。誰もいないと寂しくなる。釣りに行こう。湯泊岬の真イカはどうだろう。波はなさそうで雨もまず降らないだろう。1年前のイカ仕掛けを出して点検した。そして、去年までは遠投に苦勞していたので、今回は25号竿で臨むことにした。

まず、ソイを狙って、2本の竿にタカノハ仕掛けを代用し、カツオを付けて振り込み、鈴を付けて対応する。イカ釣りの道具は、道糸にナイロン4号、3～5号対応のウキ止めゴム2個、ビーズ。遊動ウキサルカンに8号棒ウキ。棒ウキには高輝度LEDウキトップライトシャイナー電ケミ赤。ケミカルライト50用には入口が短かったので予備のチューブを付けて対応した。ビーズ、ウキ止め2個、水中集魚ライト、ナイロン3号ハリス50cm、M3エサ巻テラーにカツオの組み合わせだ。

ウキ下に水中ライトがあるのでそれがカラミ防止になって絡んだことは一度もなかった。距離も出るようになったし、何より視認性がよい。磯周りの藻絡みも多少強引にやっても道糸が切れることはない。しかし、アタリは全くなかった。岩老港から出るイカ釣り船は出ていない。遠くに漁り火が点々と見えるが、留萌沖、もしくは浜益沖だろう。

最後に鈴が鳴ったので合わせてみるとガヤだった。美味しそうな色をしていたが、1匹ではどうしようもないのと、ハリ掛かりが良かったのでリリースした。